編輯後記

一　この卷「黃表紙廿五種」の解題及校訂一切は、山口剛氏の力に成つたものであるが、編輯及製版上のことに就いては、善惡共に當編輯部にその責任がある。たとへば、風敎上抹殺を必要とする箇所の如き、校訂者山口氏の意見といふよりは、むしろその御一任を受けて當編輯部に於いてこれを處理した。黃表紙は、繪と文と相俟つて初めて一體をなすものであるが、文だけでは何の事もないもので繪の方にあやしい箇所もある。さういふ場合は、餘儀なく畫面を抹殺或は變更した。繪と文と共に如何と思ふものは、むろん兩者ともに割愛せざるを得なんだ。それらの箇所を何頁何行目の文何字、或は第何頁の繪のしか〳〵といふ風に、茲におことわり致し度いのであるが、一たん抹殺したものを、また改めて愛惜するやうで却つてどうかと思ふから、知る人ぞ知る、全然暗から暗にすることにした。餘儀ない事情を御諒恕下さい。

一　本文の校正に就いては、校訂者山口氏及同氏夫人をせきたてて、炎暑中大いに御苦勞をかけたことであるが、校訂者の興味は、假名書の本文を如何に讀み如何なる漢字をこれに當てるかにあつて、活字その物に對してまで十二分の興味を持つて戴くことは、仕事を急ぐ上からも無理なことであつた。編輯部においても、むろん三校四校したことであるが、假名づかひその他、活字その物の統一等についてまで、校訂者の領分内に入つて、檢討整理する遑がなかつた。從つて文字いぢりの嫌辯者から見るならば、或は校正上の統一を缺く箇所もあるであらうが、それは或る大學者のまとふ衣物の微小なるシミが、その人の學力と更に交渉を感ぜぬ如く、本書の眞價とは別問題のことであらしめたい。校正といふ仕事は、イヤな仕事で、むづかしいところはちやんと行つてゐて、つまらぬ一字二字の見落し、それも本になつて見ると、誰でも直ぐ見つけられるやうな誤りを見落して居る場合がある。

おそらく天下何人も「校正の自慢」だけは出來ぬことと思ふ。殊に發行を急ぎに急いだこの卷には、さういふ誤植が間々あるであらうと思ふと、折角の努力もいやになるがそれも致し方がない。もしさういふ點があつたなら會員諸賢の御深切によつ

て隨時訂正して行かして戴きたい。こちらで見つけたものは、本會の機關紙「書物愛」その他の機關によつて直ちに正誤表をお送り致す故、御めいめいに貼込むか、書込んで戴き度い。例へば「備前播盆一代記」と入替へて、一番最後に追加した馬琴作「世諺口紺屋雛形」の柱の如き、諺と間と間違へてある。多勢で何十度も見て、いよ〳〵刷上つて初めて發見するといふ風で、訂正する遑がないから、そのまゝにして送ることにした。さういふ點では、第二回配本の「近松名作集」は、ゆつくり時間をかけて致しただけに、大いに自慢したいやうな氣がする。ソレまた自慢が出る。「校正」ばかりは自慢するものぢやないと、自らたしなめつゝも——。

一　黃表紙廿五種、各卷の表題を中扉として、それに原本の貼外題を用ひたものと、用ひぬものと、御覽の如く、いろ〳〵になつてゐる。貼外題も或るものは、その中の「上」「中」「下」等の文字を抹殺したのがある。「金々先生榮花夢」の如きそれで、題字の下の「下」の字を抹殺した。それらは全體の體裁の上からしたことで、一種上中下三卷、完全に黃表紙の體裁そのまゝに掲載したのは、「心學早染草」一種だけで、他はいろ〳〵の都合上、その體裁にすることが出來なかつた。假に紙數の上から云つても「心學早染草」のやうにすると四頁づつふえる、廿四種について四頁づゝ增加すると、全體からいふと九十六頁もふえることになる。それらも斟酌の上に入れた。どう探しても貼外題の全然見つからぬものもあつた。「狂言好野暮大名」の如きそれで、止むなく活字でと思つたが、それも業腹なれば、いやがる山口剛氏を煩はして名筆を揮つて戴いた。

もと〳〵序文のない本もある。序文があれば、表題裏の空白頁に、原本の木版と對照して、その飜譯の活字文を入れたりして體裁をなしたが、貼外題も一枚きりより外になく、序文もないといふ本は、その空白をうめ、同時に興を添える爲に、他の黃表紙から材をとつてカツト代りの繪を挿入した。例へば、「大悲千祿本」や、「馬鹿長命子氣物語」の表紙裏、「心學早染草」の「中」「下」兩卷の外題裏の如きそれである。

一　御覽の如く、本卷に收めた黃表紙廿四種の中には、木版本の文字をそのまゝ保存して、その飜譯を頭註組にしたものと、文字は一切消してその代

りに、同様の體裁で活字をはめ込んだものとある。一は研究者の爲に不鮮明ながらも原本との校合の便を與へんがため、一は一般讀書子の爲に樂々と讀めるやうにせんがため、煩をいとはず兩樣の版面に致したのであるが、これらも山口氏より一任された當編輯部が勝手に致したことである。全部を從來の覆刻本の如く頭註組で押通すなら、これは樂な仕事で製版上何等の面倒も要さなかつたであらうが――但し本卷にはその頭註組すら各頁の文字數の多少によつて活字を大小にしたり、行間をあけたりして、隨分面倒な骨折は致して居るが――繪の中に本文の活字を、原本の體裁のやうに組込んで行くといふ仕事は、竝大抵の苦心ではなかつた。かういふ試みはおそらく我が出版界空前のことであり、また到底マネの出來ぬ一種の組版藝術だと自信する。編輯部員一同の努力は、もとより當然であるが、その活版面の組みについては、福井安久太氏の、これまた半道樂的努力に俟つところが多かつた。

一　繪の修正手入については、松山莊平氏を煩はした。何分にも原本の汚いのには閉口した。きれいな本も何處かにあるであらうが、キレイにも汚いにも、俄かには、てんで手に入らぬのだから致し方がない。中には隨分綺麗な本もあつた。內田魯庵氏所藏の「桃太郎發端話說」や、笹野堅氏所藏の「人間萬事吹矢的」の稿本の如き、その一例で、それらは全然修正の要もなく、複寫寫眞その物が、そつくりそのまゝ原稿に用ひられた。

一　いよ〳〵のオフセット製版は、共同印刷株式會社と、東京プロセス社と二ケ所においてし、印刷は、上記共同印刷と、東洋印刷株式會社及小林印刷所の三ケ所で急がしめた。

オフセット製版及印刷面の面白いことは、古書の木版刷の味ひを、さながらに彷彿させる事の出來ることで、これは從來の凸版印刷では出來ない。凸版では、總ての線が餘りに器械的にハツキリときまり過ぎて柔かなカスレなどにいひ知れぬ妙味を持つ木版刷の趣致と遠ざかり易い。さういふ點ではコロタイプ印刷が一番いゝのだが、あれは又全體に薄墨色がかゝるので、どうも感じが暗くなる。純白な紙面に線畫だけクツキリ浮かすといふことが出來ない。凸版のその堅さを柔げ、コロタイプのその暗さを明るくして、木版刷その物のやうな匂ひなり味ひなりを出すには、オフセット印刷

に限るやうである。殊にそれがこの卷のやうな繪の多い本の覆刻に目立つて有效に應用され得る。例へば從來の所謂凸版印刷では、黑いところが、一面にベッタリ黑くなつてしまふ。本書百九十一頁の屋根瓦、六十一頁の暖簾や女の帶のやうなところが漆でもぬつたやうに墨黑々となつてはギゴチない。本書のどこを一寸あけて見ても分るが、例へば四百三十一頁の竹の桁根、五百四十四・五頁のお菰さんの菰のやうな線は、手摺の木版を、そのまゝに見せてゐる。百五十八頁の女の影繪なんか、印刷が汚いのだと思はれては浮ばれない。しかし原本が汚いところが多いのには閉口した。なまじ手を入れて似て非なるものにするよりはと思つて、文字の如きは殆どそのまゝ、汚いものは汚いなりに覆刻した箇所もあるので、さういふ箇所は、も少しゝ原本が手に入つたなら、もつとよい版面にすることが出來たであらうが、珍本捜出難の近頃では、それも致し方がなかつた。老婆心かも知れぬが、とにかく繪の線がカスレたり、きれたりしてゐても、それは印刷が惡いからではない、むしろ原畫の味ひを出すためにその儘にしたものであるといふことを玆に一言お斷り致しておく。その證據には、活字面がキレイに出てゐることによつて、一目瞭然ではあるが。——

一事はなかつた。こゝまでする迄には、實に編輯、組版、製版、印刷、それらに關する幾百人かの熱い息が八百餘頁の隅から隅まで、幾百回と吹きかけられてゐる。それでもまだ、粗忽が何處かにあるかも知れぬと思ふと、一完本を作ることの至難さを、あらためて痛感する。

記して大方の御叱正をまつ。

日本名著全集編輯部記

大正十五年十月五日印刷
大正十五年十月八日發行

日本名著全集
第一期出版
江戸文藝之部
第十一卷
貴表紙廿五種
（非賣品）

編輯發行兼印刷者
東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地
日本名著全集刊行會
代表者 石川寅吉

發行所
東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地
日本名著全集刊行會
電話浪花一八四〇番一八四一番
振替東京一八四四番

日本名著全集

第一期出版

「江戸文藝之部」全廿六卷及追加篇二卷 書目豫定一覽

（但し種々の事情により多少の變更あるべし。）

第一卷 第二卷 西鶴名作集 上下

○好色一代男　○好色二代男　○好色三代男　○好色一代女　○好色五人女　○男色大鑑　○武道傳來記　○武家義理物語　○新可笑記　○西鶴諸國咄　○懐硯　○近代艷隱者　○日本永代藏　○世間胸算用　○織留　○本朝二十不孝　○本朝櫻隱比事　○西鶴置土產　○萬の文反古　○名殘の友　○俗つれづれ　○一目玉鉾

第三卷 芭蕉全集

正篇　○蕉翁一代の句集　○連句集　○文集　○句評　○紀行　○消息　○遺語

外篇　○冬の日　○春の日　○初懐紙　○曠野　○ひさご　○猿簑　○深川集　○炭俵　○別座敷　○續猿簑

附錄　○枯尾花　○芭蕉翁行狀記　○芭蕉翁繪詞傳

第四卷 第五卷 近松名作集 上下

○花山院后諍　○世繼曾我　○賢女手習　○門出八島　○凱陣八島　○源氏烏帽子折　○出世景清　○團扇曾我　○蟬丸　○最明寺殿百人上萬　○曾根崎心中　○薩摩歌　○雪女五枚羽子板　○用明天皇職人鑑　○心中二枚繪草紙　○兼好法師物見車　○碁盤太平記　○卯月の紅葉　○堀河浪の鼓　○卯月潤色　○心中重井筒　○傾城反魂香　○心中萬年草　○待夜の小室節　○淀鯉出世瀧德　○五十年忌歌念佛　○艶狩劍本地　○今宮の心中　○百合若大臣野守鏡　○心中刃は氷の朔日　○夕霧阿波鳴門　○吉野都女楠　○嫗山姥　○長町女腹切　○冥途の飛脚　○大經師昔曆　○生玉心中　○國性爺合戰　○槍權三重帷子　○壽の門松　○會我會稽山　○傾城酒呑童子　○博多小女郎浪枕　○平家女護島　○雙生隅田川

○心中天網島　○攝津國女夫池　○女殺油地獄　○信州川中島合戰　○心中宵庚申　○關八州繫馬

第六卷 第七卷 淨瑠璃名作集 上 下

○雪女　○本海道虎石　○心中涙の玉井　○金屋金五郎浮名額　○金屋金五郎後日雛形　○椀久末松山　○お染久松袂の白しぼり　○八百屋お七　○笠屋三勝廿五年忌　○心中二つ腹帶　○傾城思升屋　○愛護若瑚箱　○富仁親王嵯峨錦　○鬼鹿毛無佐志鎧　○大塔宮曦鎧　○須磨都源平躑躅　○壇浦兜軍記　○蘆屋道滿大內鑑　○茨木萱桑門筑紫轅　○敵討檻樓錦　○御所櫻堀川夜討　○釜淵雙級巴　○ひらがな盛衰記　○鶴山姫捨松　○夏祭浪花鑑　○菅原傳授手習鑑　○義經千本櫻　○假名手本忠臣藏　○双蝶々曲輪日記　○一谷嫩軍記　○本朝廿四孝　○奥州安達原　○關取千兩幟　○近江源氏先陣館　○神靈矢口渡　○妹背山婦女庭訓　○攝州合邦辻　○新版歌祭文　○伊賀越道中雙六　○近頃河原達引　○絲櫻本町育　○繪本太閤記

第八卷 歌舞伎脚本集

○參會名護屋　○兵根元曾我　○源平雷傳記　○百夜小町　○傾城淺間嶽　○成田山分身不動　○中將姫京鏡　○丹波與作手綱帶　○傾城壬生大念佛　○鳥邊山心中　○蟷髪歌仙櫻　○心中鬼門角　○伊勢頭戀寢刃　○漢人漢文手管始　○五大力戀絨　○金門五三桐　○四谷怪談　○與話情浮名横櫛

第九卷 浮世草子集

○傾城色三味線　○傾城曲三味線　○傾城歌三味線　○世間息子氣質　○浮世親仁氣質　○世間娘氣質　○咲分五人娘　○傾城禁短氣　○商人軍配團　○棠大門屋敷　○鎌倉諸藝袖日記　○日本新永代藏　○御前義經記　○好色萬金丹

第十卷 怪談名作集

○御伽婢子　○狗張子　○玉箒木　○虛實雜談集　○怪談登志男　○近世百物語　○西播怪談實記　○茅屋物語　化物判取帖　○豐年珍話集　○實物語　○怪談實錄　○英草紙　○繁々野話　○雨月物語　○垣根草　○莠句冊　○近代百物語　○怪談記野狐　名玉　○怪談名香富貴玉　○淸誠談　○臥遊奇談　○深山草　○怪異前席物語　○古加良志草紙

第十一卷 黃表紙廿五種

○金々先生榮花夢　○親敵打腹鼓　○長生見度記

○唾多雁取帳　○狂言好野暮大名　○大悲千祿本
○江戸生艷氣樺燒　○英切自根金生木　○文武二道
万石通　○孔子縞于時藍染　○心學早染草　○卽席
耳學問　○盧生夢魂其前日　○馬鹿長命子氣物語
○世上洒落見繪圖　○桃太郎發端話說　○十四傾城
腹之内　○金々先生造化夢　○忠臣藏前世幕無　○
世諺口紺屋雛形　○稗史億說年代記　○御誂染長壽
小紋　○的中地本問屋　○人間萬事吹矢的　○人間
萬事吹矢的（草稿）

第十二卷　洒落本集

○傾城買四十八手　○契情買虎の卷　○嫖客三體誌
○娼妓絹飾　○遊子方言　○月花餘情　○百花評林
○大抵御覽　○異素六帖　○廓中奇譚　○辰巳の園
○和唐珍解　○通言總籬　○令子洞房
○寸南破良意　○仕懸文庫　○辰巳婦言
語錄　○聖遊廓　○錦の裏　○猫射羅子　○道中酔
○眞女意題　○甲驛夜の錦　○三教色　○契國策
齬　○起承轉合　○粹町甲閨　○田舍芝居　婦美車紫
酒美撰　○夜半の茶漬　○志羅川夜船　○穴學問
○狂訓彙軌本紀　○娼妓地理記　○遊僊窟煙の卷
○女郎買糟味噌汁　○美地の蠣殼

第十三卷　讀本集

○昔話稻妻表紙　○本朝醉菩提　○日本水滸傳　○
旬傳實々記　○三七全傳南柯夢　○飛驒匠物語　○
天羽衣

第十卷　滑稽本集

○浮世風呂　○浮世床　○花暦八笑人　○四十八癖
○妙竹林話七偏人　○古朽木　○奇妙圖彙　○小紋
雅話　○和歌始衣抄　○客者評判記　○無駄砂子
等。○附錄に落語本を添ふ。

第十五卷　人情本集

○春色梅暦　○春色辰巳園　○春色惠之花　○英對
暖語　○梅見船　○閑情末摘花　○假名文章娘節用
○八萬鐘

第十六卷　南總里見八犬傳　上中下

第十七卷　膝栗毛其他

第十八卷

○東海道中膝栗毛　○木曾街道膝栗毛　○六阿彌陀
詣

第十九卷　修紫田舍源氏　上下

第廿卷

第廿一卷　和文和歌集　上下

第廿二卷

第廿三卷

○眞淵歌文集　○蘆庵六帖詠草　○桂園一枝（景樹）

○うけらが花（千蔭）　○琴後集（春海）　○宗武歌集　○曙覽歌集　○藤簍冊子（秋成）　○言道歌集　○良寛歌集　○女流歌文集

第廿四卷　俳文俳句集

○五元集（其角）　○五元集拾遺（同）　○五元集脫漏（同）　○雜談集（同）　○類柑子（同）　○玄峰集（嵐雪）　○其袋（同）　○去來丈草發句集（鬼貫）　○鬼貫句選（鬼貫）　○七車（同）　○ひとりごと　○とくとくの句合（素堂）　○韻塞（許六）　○笈日記（同）　○風俗文選（同）　○雅文消息（許六・野坡）　○蛙合（仙化）　○俳諧職人盡（寒利）　○葛の松野（支考）　○燕村句集（燕村）　○燕村文集（同）　○十番左右句合（同）　○寫經社集（同）　○新花摘（燕村）　○明鴉（几童）　○續明鴉（同）　○新雜談集（同）　○井華集（同）　○太祇句集（太祇）　○春泥句集（春泥）　○三春日記（蓼太）　○芙蓉文集（耳得）　○白雄句集（白雄）　○骨書（樗良）　○俳ざんげ（大江丸）　○はいかい袋（同）　○曉臺句集（曉臺）　○佐渡日記（同）　○おらが春（一茶）　○一茶句集（同）　○鼠の道行（成美）　○成美家集（同）　○鳶眼集（道彦）　○鶴芝（士朗）　○斧の柄（乙二）　○續繪歌仙（宜麥）　○屠龍の技（抱一）

第廿五卷　狂文狂歌集

○古今夷曲集　○萬載狂歌集　○萬代狂歌集　○四方のあか　○四方の留糟　○千紫萬紅　○萬紫千紅　○めでた百首　○かくれ里の記　○（石川雅望の作では）狂文あづまなまり　○吉原十二時　○風來山人のものでは）風來山人六々部集（前篇）　○風來山人六々部集（後篇）　○風流志道軒　○（手柄岡持のものでは）我おもしろ

第廿六卷　川柳雜俳集

○武玉川十八篇　○柳多留三十篇　○誹風柳多留拾遺四篇　○川傍柳五篇

追加篇　第廿七卷　歌謠音曲集

○義太夫（近松名作集及淨瑠璃名作集と重複するものは之に採らず。）

○傾城阿波の鳴門（八つ目・順禮の段）　○艶容女舞衣（下の卷・酒屋の段）　○戀娘昔八丈（下の卷・鈴ケ森の段）　○桂川連理柵（下の卷・帶屋の段）　○廓文章（吉田屋の段）　○傾城戀飛脚（下の卷・新口村の段）　○碁太平記白石噺（七つ目・揚屋の段）　○花上野櫻の石碑（四つ目・志渡寺の段）　○蝶花形名歌島臺（八の切・小坂部館の段）　○木下蔭狹間合戰（七つ目・竹中陣屋の段）　○三十三間堂棟由來（平太郎住家の段）　○玉藻前曦袂（三の切・道春館の段）　○八陣守護城（八の切・正清本城の段）　○生寫朝顏日記（宿屋の段）　○壺坂靈驗記（澤市內の段）　○近江源氏先陣館（八つ目切・小四郎切腹の段）　○

鎌倉三代記（七の切・三浦別れの段）○加々見山舊錦繪（六の切・草履打の段）○太平記忠臣講釋（七つ目・喜内住家の段）○祇園祭禮信仰記（四の切・碁立の段）

○河東節

○松の内○神樂獅子○隅田川舟の内○禿萬歳
○炙する巖の疊夜着○酒中花○水調子○うか
ぶ瀬○ぬれ扇○鬼髮夜編笠○助六所縁江戸櫻
○常陸帶花柵○道成寺○供養○浄瑠璃○邯鄲
○熊野○泰平住吉踊○浮世傀儡師（外記物）○
小鍛冶名劍卷（半大夫物）

○一中節

○辰巳の四季○松づくし○泰平船づくし○高
砂松の段○神樂高砂○墨繪の島臺○萬屋助六
心中獄○自然居士過去物語○源氏妹が宿○源氏十二段
浅間入○尾上雲霞帶作小萬夢路の駒○顯光大霞○道行三
江山入○鉢の木○與○おなつ笠物狂○嶽牡丹
度笠○鵜飼石和川
源平妹脊の鶏合

○常磐津節

○老松○子寶三番叟○蜘蛛絲梓弦（仙臺淨瑠璃）
○積戀雪○關扉（關の戸）○四天王大江山入（古山姥）
○雨顏月姿繪（葱寵）○倭假名○戻駕色相肩（戻駕）
○桂川水（お半）○色七文字（源太）○帶文○壽靱猿
○松色操高砂（太神樂）○再夕暮雨の鉢木（雨の鉢

木○寄罠娼釣髭（釣狐）○後之月酒宴島臺（角兵
衛獅子）○恩愛瞳關守（宗清）○願絲絲苧環（おみ
わ）○忍奇戀曲者（將門）○花舞臺霞猿曳（新うつ
ぼ）○薪負雪間の市川（新山姥）○乘合船惠方萬
歳（乘合船）○其扇屋浮名戀風（夕霧）○景清○
勢獅子劇花籠（勢獅子）○釣女○戻り橋○三保
の松○松の島○三世相錦繡文章（おその六三）
○大森彦七

○富本節

○年朝嘉例壽（長生）○四十八手戀所譯（相撲をし
島）○百夜菊色の世中（關寺）○夫婦酒替ぬ中仲
（鞍馬獅子）○其俤淺間嶽（淺間）○道行戀飛脚
（梅川忠兵衛）○ちゑ連理橘（蟲賣）○新曲高尾懺
悔（高尾懺悔）○花川戸身替の段（身替お俊）○春
夜障子梅（夕霧）○新曲かぐら獅子（神樂獅子）
徒髮戀曲物（松風）○茂懺悔陸言（扇賣高尾）○道
行念玉蔓（長作）○幾菊蝶初音道行（忠信）○拙筆
力七以呂波（乙姫）○草枕露の玉歇和（玉川）○奈
須野○御代榮益穗富種（豐の前）○高砂女夫

○清元節

○梅の春○榮能春延壽（長生）○北州千歳壽（北
州）○四季三葉草○其小唄夢廓權八）○絲の
五月雨（小菊半兵衛）○深山櫻及兼樹振（保名）○
御名殘押繪交張（鳥羽繪）○月雪花名殘文臺（玉兎）
○詠梅松清元（茶筅賣）○色山解深川（待人）○大
和い手向五字（子守）○色彩間刈豆（かさね）○法

花委色同（山歸り）○月花茲友鳥（山姥）○筐花手
塒向橘（吉原雀）○復新三組盞（大山參り）○道行浮
六歌仙容彩（文屋・喜撰）○道行旅路の嫁入（八段目・おかげ參り）○
○おどけ俄煮珠取（玉屋）○彌生の花浅草祭（惡玉）
○再春菘種蒔（舌出し三番）○道行旅路の花聟落人（浅間）
○菊嬉閨睦言（お岩）○倭假名色古文字（菊畑三菊）
○重褄閨の小夜衣（白絲）○明烏花濤衣（浦里）○
梅柳中宵月（清心）○日月星晝夜の縫分（夜這星）○
忍逢春雪解（三千歳）○色增艶夕映（雁金）○花雲
助相扇（雲助）○青海波○助六曲輪菊（助六）

○新内節

○二重衣戀占（花咲綱五郎）○若木仇名草（蘭蝶）
○千日寺名殘鐘（三勝半七）○眞夢血染抱柏（花園
半三）○歸咲名殘の命毛（尾上伊太八）○傾城音
○羽瀧（おとは七郎兵衛）○膝栗毛「赤坂の段」○膝
栗毛「市子の段」○明烏夢泡雪（浦里）○明烏後眞
夢○累身賣の段○千日寺名殘鐘（三勝半七）

○薗八節

○道行相巨燵（梅川）○桂川戀の柵（お半）○鳥
邊山○花街の色糸（植木屋）○道行榮種の亂咲
○江戸の繪姿（おひな吉三郎）○道行綠花房（お花
半七）○口舌八景（小いな半兵衛）○小春治兵衛巨
燵の段○夕霧

○江戸長唄（めりやす大薩摩を含む）

○矢の根五郎○無間の鐘○傾城道成寺○風流
相生獅子（相聟獅子）○二人椀久○英獅子亂曲（枕
獅子）○百千鳥娘道成寺○高尾懺悔（羽衣
尾さん）○天人さなきだ道成寺）○京鹿子娘
道成寺（娘道成寺）○英執着獅子（執着獅子）
流妹脊の柱建（柱建）○門出京人形（水仙丹前）○劍烏
帽子（菊枕慈童（菊慈童）○鐘入解脫衣（解說）○劍烏
面○柳咲法樂舞（法樂舞）○諸鳥囀（鶯娘・うしろ
○夏小立與作○鞭櫻宇佐幣○ねこのつま○乘掛情
鏡關寺小町（關寺）○百夜車○娄の
面被（めんかぶり）○衣かづき思○童子（戲
○敎草吉原雀（吉原雀）○春調娘七種（七種）○相生獅子○御代
童獅子○隈取安宅松（安宅）○嫌（破車（やれ車）
染分紅葉（うはなり）○其容形七枚起請（こもそう）
松關日初戀（小松曳）○其面形二人椀久○黑か
み○東女夫六後雛形（淡島）○菊壽の草摺
○勢五大力○吹雪の雛形（雛形狂亂）○三重霞嬉
○敷顏鳥（三重霞傀儡師）○舞扇蘭生梅（舞扇）○濱
松風戀歌（濱松風）○ゆかりの月○美面より七枚
續花の姿繪（汐・猿廻し・老女）○遲櫻手爾葉七字
（花かり初め傾城・越後獅子・橋辨慶・相撲番）○戀
男調松風（調松風）○再春菘種蒔（舌出し三番叟）
罠奇掛合（大神）○四季詠寄三大字（門傾城・鹿島踊）
○閨玆姿八景・節季候・心猿・晒女）○正札附根元草
摺（正札附）○奇三津再十二支（小原女・乙姫・四
つ竹）○其九繪彩四季櫻（丁稚・天下るの傾城）○

盧生夢魂其前日　京傳作。（重政）畫　三四一
馬鹿長命子氣物語　慈悲成作。豐國畫　三七三
世上洒落見繪圖　京傳作・同人畫　三九五
昔々桃太郎發端話說　京傳作・春朗畫　四二七
十四傾城腹之内　全交作・重政畫　四五九
榮花夢（後日話）金々先生造化夢　京傳作。重政畫　四八九
忠臣藏前世幕無　京傳作・重政畫　五二一

世諺口紺屋雛形　馬琴作・子興畫　五五三

又燒直鉢冠姫　稗史億說年代記　三馬作・同人畫　五八五

延命長尺　御誂染長壽小紋　京傳作・歌麿畫　六一七

的中地本問屋　一九作・同人畫　六四九

人間萬事吹矢的　京傳作・重政畫　六七一

人間萬事吹矢的（草稿）　京傳作・筆及畫　七〇三

編輯後記　一―四